４．アレキサンダー・アラン・シャンド

「銀行簿記精法」の原著者、近代的銀行業務の指導に貢献

（１）概要

アレキサンダー・アラン・シャンドは、天保 15 年（1844 年）2 月 11 日、スコットランド・アバディーンシャー・ターリフに、父・ジェームズと母・マーガレットの長男として生まれた。父は外科医で、名家の生まれであったといわれている。

文久 4 年／元治元年（1864 年）、シャンドは、インド・ロンドン・チャイナ・チャータード・マーカンタイル銀行（Chartered Mercantile Bank of India, London &China、1959 年に HSBC が買収）横浜支店の支店長代理として来日していた。明治初頭の日本は、欧米の正式な銀行経営の実務の導入が喫緊の課題であったことから、明治 5 年（1872 年）、大蔵省は、欧米の銀行実務に精通しているシャンドを登用することとした。大蔵省紙幣寮（現在の国立印刷局）に勤務することとなったシャンドは、勤務と並行して銀行簿記に関する原稿を書き上げた。これは大蔵省内で翻訳され、同年 12 月、「銀行簿記精法」として刊行された。

「銀行簿記精法」に著されたシャンドの帳簿組織（簿記の管理記録システム）は、シャンド・システムと呼ばれ、長年にわたり銀行実務の教科書として採用されることとなり、日本の銀行簿記の基礎をつくったものとして高く評価された。また、シャンド・システムは、全国各地の銀行のみならず、多くの会社及び商人たちの間にも普及し、明治、大正、昭和に至るまで、銀行及び商工業の簿記実務に採用されることとなった。

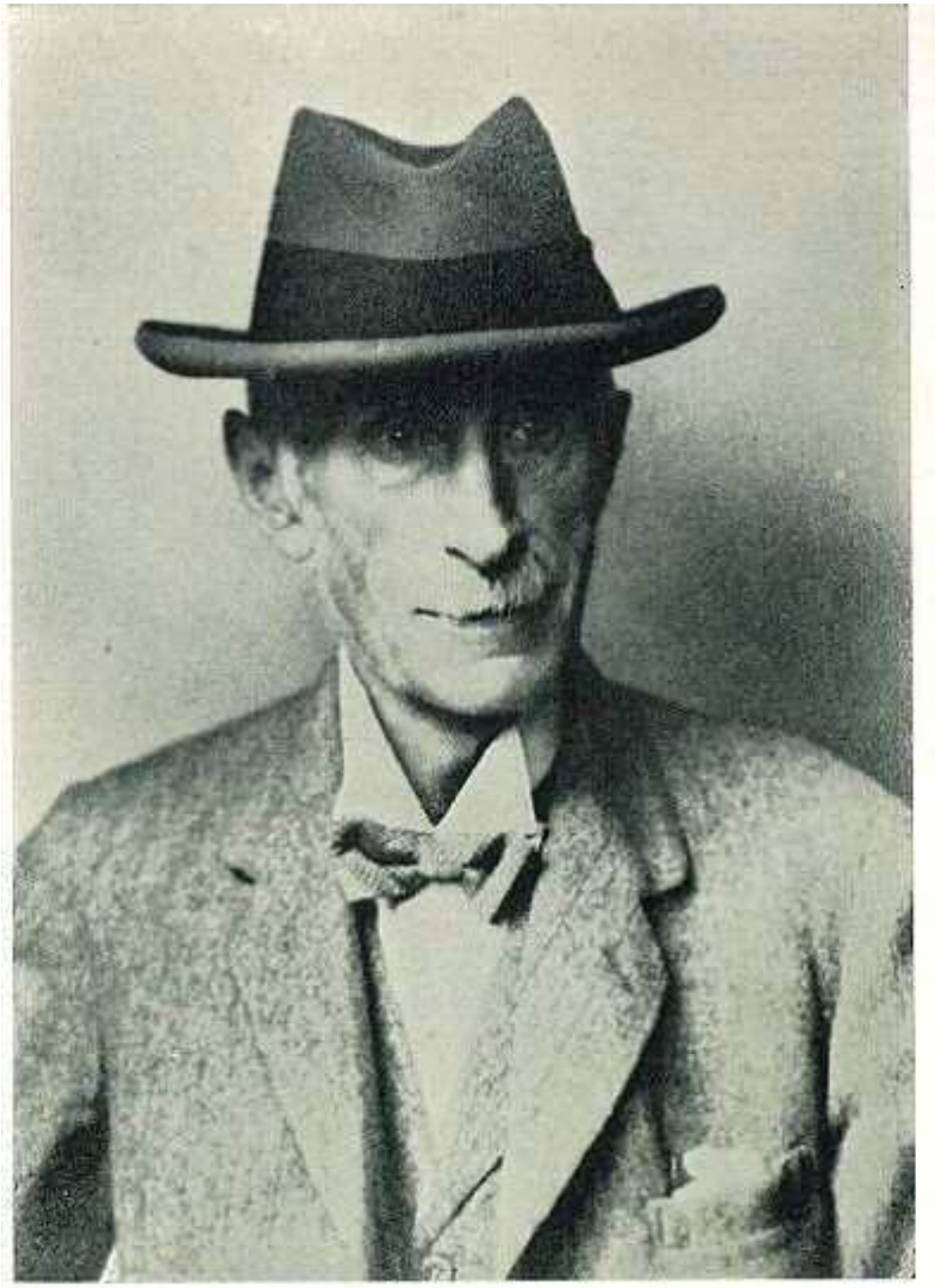
明治 7 年（1874 年）10 月、シャンドは、紙幣寮銀行課内に開設された銀行学局において、経済学や簿記等の講義を行った。この講義コースは、明治 12 年（1879 年）まで存続し、大蔵省や銀行から 340 名以上の受講生を受け入れることとなった。このようにシャンドは、銀行の帳簿・検査その他の近代的銀行業務に係る指導に尽力し、大蔵省官吏のみならず各銀行の社員の人材育成にも貢献した。

明治 8 年（1875 年）、シャンドは、第一国立銀行（現在のみずほ銀行（旧第一勧業銀行））に対する検査に派遣され、国立銀行条例第 17 条に基づく日本初の銀行検査を実施した。シャンドの検査は厳格かつ緻密であり、第一国立銀行の総監役としてシャンドの検査を数回受けた渋沢栄一も、検査によって大いに利益を得たと評している。また、シャンドは、同行以外にも複数の国立銀行の検査で活躍した。

明治 10 年（1877 年）2 月、シャンドは大蔵省を退職し、同年 3 月に帰国した。帰国した翌年の明治 11 年（1878 年）、ロンドンのアライアンス銀行（Alliance Bank、現在のロイヤルバンク・オブ・スコットランド（旧パース銀行））に入行し、明治 35 年（1902 年）には、パース銀行ロンドン支店長に昇進した。明治 37 年（1904 年）、日本国政府から、外債募集の任を受けて渡英した高橋是清（当時、日本銀行副総裁、後の内閣総理大臣）の依頼を受け、外債引受を躊躇するパース銀行の幹部をシャンドが説得したことから、同行が引受団中最高額を引き受けることとなるなど、日本の外債募集にも尽力した功績から、明治 39 年（1906 年）、勲三等旭日中綬章を受章した。

昭和 5 年（1930 年）4 月 12 日、シャンドはイギリスドウセット州パークストンで 86 歳の生涯を終えた。

アレキサンダー・アラン・シャンド



晩年のシャンド

（「シャンド：わが国銀行史上の教師」土屋喬雄著　東洋経済新報社 1966 年　口絵より）